

1 はじめに

(1) 東山動植物園再生プランの経緯

ア 基本構想の策定

「環境の世紀」といわれる 21 世紀における、動植物園の果たすべき役割・使命の変化を背景に、「生命（いのち）をつなぐ」を基本理念として、6 つの基本方針を定め、東山動植物園の目標に「人と自然をつなぐ懸け橋へ」を掲げる「東山動植物園再生プラン基本構想」を平成 18 年 6 月に策定した。

イ 基本計画の策定

基本構想の実現へ向けた具体化案として、平成 18 年度より基本計画の作成に着手、平成 19 年 6 月に「東山動植物園再生プラン基本計画」を策定した。これにより、東山動植物園における展示の基本的な考え方や施設整備の方針、整備スケジュールなどを示した。

ウ 現在の状況

基本計画策定後、個別区域の施設設計にとりかかり、平成 20 年度から順次工事に着手し、動物園でチンパンジー舎、植物園で桜の回廊と東海モデル林、地域の自然学習林が完成した。また平成 21 年度には、ニホンザル舎、ゾウガメ舎が完成し、メダカ館の改修工事も完了した。



チンパンジー舎
(平成 20 年 11 月オープン)

(2) 基本計画の見直し

ア 社会情勢の変化

名古屋市内の歴史文化的施設全体の再生との関わりを重視した市政の方向性と、景気後退の社会情勢から、巨額投資が必要となる東山動植物園の再生について、一旦立ち止まることとなった。

イ 新たな視点の追加

東山動植物園の再生は、平成 18 年度に策定した東山動植物園再生プラン基本構想を継承することとし、

- ① 現存する歴史文化的施設や樹木、景観に配慮する。
- ② 市民により一層楽しんでいただく。

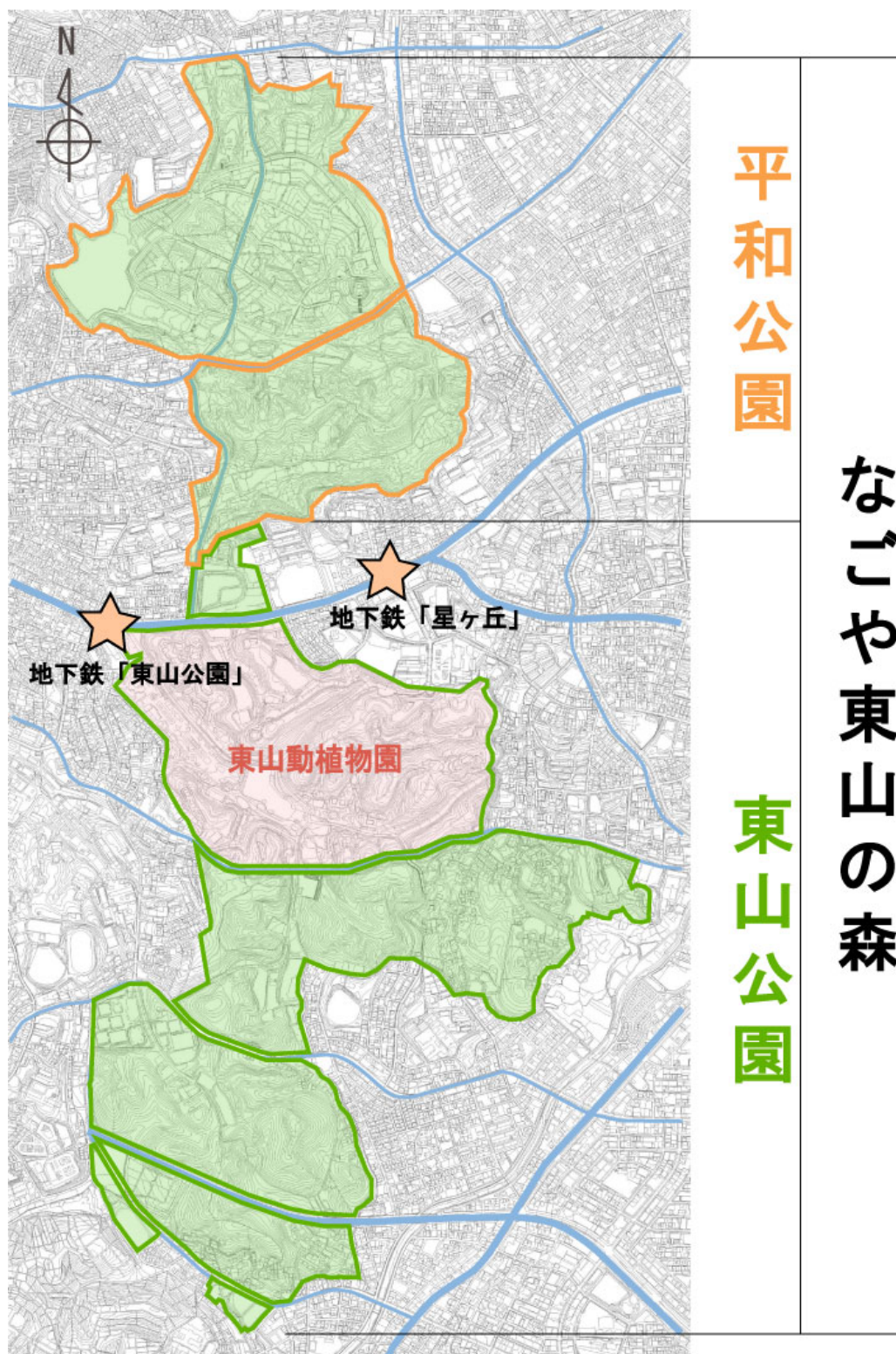
の 2 点を新たな視点として加え、実施時期、規模、内容など身の丈にあった再生手法で、基本計画の見直しを行った。

2 東山動植物園再生プラン基本計画のフレーム

(1) 基本計画の対象

基本計画は、東山動植物園の再生及びそれを核とした約 400 ヘクタールの東山の森づくりを行うとともに、ひいてはその周辺地区のまちづくりを目指すものである。

【基本計画対象区域図】



(2) 基本計画の位置付け

「東山動植物園再生プラン基本構想」（以下「基本構想」という。）の基本理念及び「なごや東山の森づくり基本構想」の基本理念を踏まえ、東山動植物園再生プラン基本計画（以下「基本計画」という。）を策定する。

【基本計画の位置づけ】

東山動植物園再生プラン基本構想
（平成 18 年 6 月策定）

なごや東山の森づくり基本構想
（平成 15 年 7 月策定）

＜基本理念＞

生命（いのち）をつなぐ
持続可能な地球環境を次世代に

＜基本理念＞

人と自然の生命輝く東山の森づくり
森づくりから共生型社会の実現をめざす

＜東山動植物園の 2 つの使命＞

「環境」 「大交流」

＜基本構想の 6 つの基本方針＞

- ・「見るもの」と「見られるもの」の垣根の除去
- ・希少動物の「保護」と「増殖」への貢献
- ・「娯楽」と「学習」の両立
- ・「動物園」と「植物園」の融合
- ・「東山の森」と「動植物園」の一体的活用
- ・「市民」と「行政」の協働

＜基本方針＞

協働して魅力豊かな森づくりを進める

- ・森を守り育てる
- ・森と関わる
- ・森づくりを生かす

東山動植物園再生プラン基本計画



東山動植物園の春



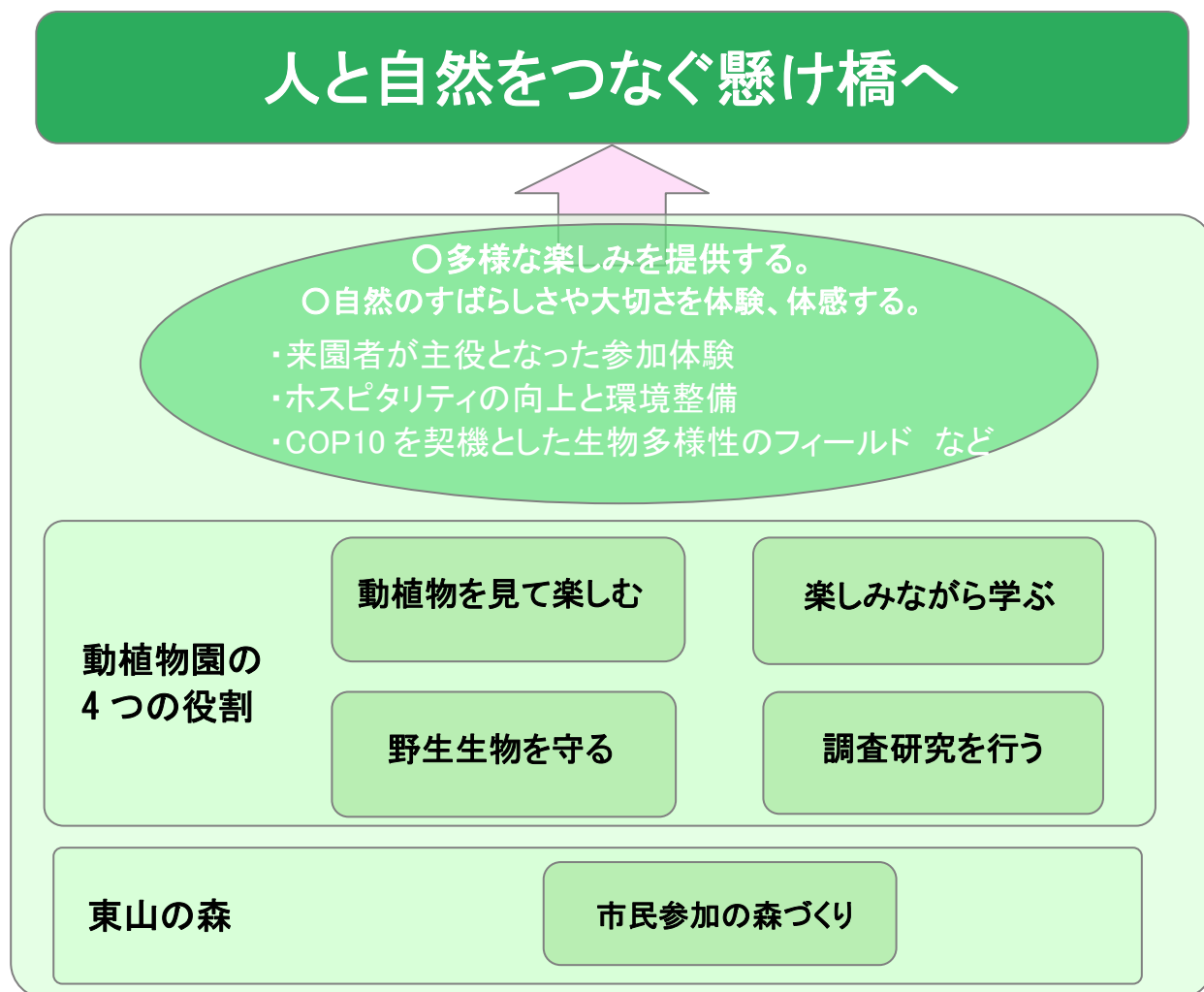
東山動植物園の夏

(3) 基本計画の目標

動植物園では、主に展示、環境教育、種の保存、調査研究を、東山の森では市民参加による森づくりを展開することにより、自然のすばらしさや大切さを体験、体感するとともに、市民の様々なニーズに対応した楽しさを提供するフィールドとすることで、「人と自然をつなぐ懸け橋」に生まれ変わることを目標とする。

また、市民が誇れる動植物園として本市の観光拠点となることも目指す。

【基本計画の目標】



東山動植物園の秋



東山動植物園の冬

3 動植物園の再生

(1) 計画の背景及び条件

ア 東山動植物園の立地

東山動植物園を含む東山公園は名古屋市の東部に位置し、都心の栄から東へ約 5 kmの身近な距離に位置する。一方で、都市の緑地としては日本最大級である東山の森約 400 ヘクタールに包まれるという、この上ない自然環境に立地し、東山動植物園の目指す「人と自然をつなぐ懸け橋」としての機能を発揮する上で極めて格好のロケーションとなっている。

動植物園の周辺は、高校・大学など文教施設、ファッショナブルな商業施設が立ち並ぶほか、散策やハイキングが楽しめる一万歩コースなどが整備されており、多様なニーズに応えるレクリエーションスペースとなっている。

鉄道交通、自動車交通のいずれのアクセスにも恵まれており、年間約 200 万人もの入園者数を誇る東山動植物園は、日本有数の動植物園であり、名古屋市民はもとより、この地域の人々のこころのふるさと・特別な思い出のある場所となっている。



東山動植物園の全景



多くの人でにぎわう園内の様子

イ 東山動植物園の歴史

(ア) 東山前史

東山動植物園が位置する地域は、江戸時代から新田開発がすすめられ、猫洞池（現：猫ヶ洞池）、七ツ釜池（現：新池）、源蔵池（現：上池、胡蝶池）といった農業用のため池が築造されていった。

明治初頭には末森村とよばれていたが、その後周辺の村と合併し田代村、東山村と変遷、大正時代に名古屋市に編入された。こうして市域に組み込まれた東山の丘陵地に、昭和 10 年東山公園が開園することとなったが、動物園と植物園はまだ存在しなかった。

名古屋市営動物園の歴史は、鶴舞公園に動物園を開園したことに始まる。鶴舞の動物園開園から 19 年後の昭和 12 年 3 月、東山公園内にまず植物園が先に開園し、ついで動物園も開園し東山動植物園の歴史が幕をあけた。



開園初期の動物園



昭和 12 年開園当時の温室

(イ) 開園時の様子

東山動物園は、鶴舞時代と比べて約 13 倍の面積となり、ドイツのハーゲンベック動物園が開発した無柵放養方式をライオンとホッキョクグマの放養場に取り入れ、当時としては大変斬新な動物園だった。

東山植物園は、「東洋一の水晶宮」と称された大温室とその前庭、植物分類園等で構成されていた。

(ウ) 戦争の惨禍をのりこえて（「ゾウ列車」物語）

順調なスタートをきった東山動物園・植物園であったが、すぐに太平洋戦争が始まってしまう。軍の接収により動物園も植物園も休園を余儀なくされ、多くの動物が死んでいく中で、2 頭のゾウは関係者の努力により戦争を生き延びた。

昭和 21 年、東山公園は再開し、楽しみの少ない荒廃した世相の中で非常に大きなレクリエーション的役割を果たした。

とくに、戦争を生き延びた 2 頭のゾウ、マカニーとエルドが、子どもたちに夢を与え、戦後の東山の人気を支えたのは言うまでもない。

やがて、ゾウのいない東京の子どもたちから、「ゾウを1頭、譲ってください。」と熱心な陳情が始まり、ついには都知事を立てての陳情となった。無理に2頭を引き離すのはかわいそうということで、代替案として持ち上がったのがゾウ見学のための臨時列車「ゾウ列車」である。関係者の努力により昭和24年「ゾウ列車」は実現し、東山の歴史に大きな足跡を残している。



陳情に訪れた東京の子どもたちの代表

その後東山にやってきたゴリラは20種類以上の芸をこなすゴリラに成長して大人気となり、ゾウに代わって東山の代名詞となった。

(エ) 東山動植物園の一体化

昭和43年7月29日、本市は、「東山総合公園再開発計画」を発表した。その第一歩として、動物園と植物園が「東山動植物園」として一体化された。

動物園では、第1号としてバードホールを建設し、続いてこども動物園を建設し、「見せる動物園」から「ふれあう動物園、動物本位の動物園」へ方向転換した。

さらに北園では、遊園地を移設し、アフリカ大陸の動物や猿、類人猿の展示が充実していった。

植物園では「余暇時代に対応する近代的な植物園への脱皮と自然保護」をテーマとして、洋風庭園の改造と日本庭園の建設、温室の拡充整備などが行われた。開園以来の歴史をもつ温室については、当初の部分を保存しつつその裏側にあるサンギャラリーなどを「珍しい植物収集の温室から美しく見せる温室へ」と改築していった。

(オ) 待たれる東山動植物園の再生

東山動植物園は、昭和40年代には年間300万人をこえる人が訪れる施設になったが、その後は娯楽の多様化などの影響もあり、昭和59年のコアラの来園や、バブル期の好景気に支えられた開園50周年（昭和62年）、名古屋市政100周年（平成元年）といった節目の年を除き入園者数が減少しつつある。



日本で最初のコアラの赤ちゃん

また、バブル崩壊後の長期にわたる不況など経済状況の影響もあり、老朽化した獣舎等の施設の更新が大きく遅れている。

開園から既に70有余年を向かえ、施設の老朽化や陳腐化、それに伴う入園者数の減少も課題となっていており、再生を計画したものである。

ウ 東山動植物園の歴史的資産

昭和 12 年の開園以来、市民の皆様に関われてきた東山動植物園には、開園当初からの施設や巨樹、他から移築された文化財などが多く存在しており、良好かつ歴史的な景観を形成している。こうした景観を未来につないでいくために、保全・活用すべき主な歴史文化的施設等について、以下のように整理した。

No.	保全すべき施設等	理由
①	正門の門柱・胡蝶池とケヤキの木に囲まれた噴水	開園当初からある施設で、正門から噴水の辺りまでは、動植物園の顔として広く市民に関われてきた景観である。正門エントランスゾーンにて保全活用する。
②	噴水先の主園路サクラ並木（チェリーガーデン）	チェリーガーデンは昭和 36 年完成。長年市民に関われてきた桜・景観である。今後、原則的には保存し、一部の腐食が進んだ樹木は更新する。
③	ゾウ列車（モニュメント）	平成 11 年「ぞうれっしやのなかまたち」の会から寄贈されたモニュメントがアジアゾウ舎前にあり、「ゾウ列車」の歴史を後世に伝えていく。アジアゾウ展示エリアにて保存活用する。
④	動物慰霊碑とのかたわらにあるクスノキ	動物慰霊碑は昭和 39 年に建立。クスノキは「名古屋市の木」に指定されており、園内ではこの木が最大である。今後も保存する。
⑤	ライオン舎	開園当初からある施設で、ドイツのハーゲンバック動物園が開発した無柵放養方式を猛獣舎として日本で初めて取り入れた。保存活用を図る。
⑥	古代池と恐竜像	開園 1 周年を記念して建設され、巨大な像と池にたたずむ 3 体の恐竜は、多くの市民の記憶に残っている。休憩・広場スペースの一角にモニュメントとして保存活用する。
⑦	トウカエデ並木	昭和 10 年、東山公園の中央広場（現：植物園門前の交差点）に至る園路の築造とともに植えられた。豊かな緑陰と紅葉の時期以外も美しいトウカエデ並木は、植物園への入口としてだけでなく散歩道としても親しまれている。景観と共に保存する。



位置図

No.	保全すべき施設等	理由
⑧	東山モノレール	昭和 39 年、世界で初めての本格的なサフージュ式懸垂型モノレールが東山公園内に開通。動物園駅（現：アムールトラ舎）と植物園前駅（現存）471mを結ぶ。昭和 49 年に運休、廃止されたが、当時の車両が植物園前駅に保存されている。今後も産業遺産として保存する。
⑨	温室（前館）	開園当初からある施設で、現存する植物園温室としては日本最古のものであり、かつて「東洋一の水晶宮」と呼ばれた。わが国における初期の本格的な全溶接鉄骨造建築であるなど、建築技術史上重要で価値が高いものとされ、平成 18 年 12 月に国の重要文化財に指定された。温室の中には、開園当時からの植物もある。文化財施設として保存活用する。
⑩	武家屋敷門	昭和 42 年、尾張藩士兼松家の門を名古屋市東区から移築したものである。（名古屋市文化財）日本文化を現代に伝える施設として保存する。
⑪	合掌造りの家	天保 13 年（1842）築。岐阜県大野郡白川村大牧の関西電力・鳩谷ダムの建設に伴う水没予定地にあったものを、寄付を受けて昭和 31 年に東山に移築し保存している。平成 19 年には屋根の葺き替えを行った。日本文化を現代に伝える施設として保存活用する。
⑫	ほたる沼脇のメタセコイア	昭和 25 年にアメリカから日本に贈られた 100 本のうちの 1 本。メタセコイアは絶滅種だと思われていたのが、昭和 20 年に中国で発見されアメリカで栽培された。昭和 24 年の小石川植物園、皇居につぐ日本で 3 番目の古木である。今後も保存する。
⑬	古窯	昭和 46 年、日本庭園を造成中に発見された。このとき鎌倉時代初期の瓦や香炉、壺などが出土している。（名古屋市埋蔵文化財・東山古窯群の 1 つ）東山の歴史を伝える施設として保存する。



開園時から現存する噴水とケヤキ（正門付近）



開園時から現存するトウカエデ並木

(2) 動植物園の再生の全体像

ア 全体配置計画

都市に残る貴重な緑や東山の歴史文化的施設に十分に配慮し、かつ、都市公園としての機能も十分に確保した上で、都心で身近に動植物とふれあうことができ、“人と自然をつなぐ懸け橋”となる動植物園として再生を図る。

再生にあたって、動植物園のゾーン計画をテーマ毎に設定するとともに、ゾーン内には「にぎわいのコーナー」の設置を計画する。

(ア) ゾーン計画

動物を中心に展開するゾーンでは、動物と人、動物と植物の関わりが理解できるように、生息地別の展示ゾーンに分けることを基本とする。植物を中心に展開するゾーンでは、植物と人との関わりが理解できるように、人と植物の関係をテーマとした展示ゾーンに分けることを基本とする。

- | | |
|---------------|----------------|
| ○正門エントランスゾーン | ○北園門・遊園地ゾーン |
| ○アジアゾーン | ○上池ゾーン |
| ○アフリカゾーン | ○世界の植物と文化ゾーン |
| ○海洋ゾーン | ○日本の植物と文化ゾーン |
| ○アメリカゾーン | ○日本の里ゾーン |
| ○オセアニアゾーン | ○花と緑のふれあいゾーン |
| ○魚類、両生・ハ虫類ゾーン | ○星が丘門エントランスゾーン |
| ○日本ゾーン | |

(イ) にぎわいのコーナー

快適な飲食スペース、トイレ、救護・休息スペース、授乳スペース、おむつ換えスペースなどを充実し、また東山の歴史文化的施設も活用した、にぎわいのコーナーを園内各所に計画する。

【ゾーン計画図】



イ 動線計画

安全・安心、快適に利用できる施設として、園内の骨格となる動線を再整備する。
動線については、来園者動線と管理動線を極力分離し、安全・安心の確保を図る。
来園者用の動線については、歩行動線と移動補助手段動線を計画する。

(ア) 歩行動線

園内各ゾーンを結ぶ動線を主園路としてループ状に確保する。

ループ状の回遊動線（主園路）については、テーマ性を持ったモデル観覧ルート（2時間コース、進化を知るコース、春・秋のおすすめ散策コースなどテーマ設定）も設定するなど、初めて来園された方も、わかりやすく園内を観覧できるよう計画する。

主園路は極力バリアフリーとするが、既存樹林の保全などの理由から地形の改変を最小限とすべく、一部勾配が急な箇所には手すりを設置するなどの対応を行う。

(イ) 移動補助手段動線

起伏の多い園内に対応するために、トラム、カートなど移動補助手段を確保する。
また、特に起伏の激しい植物園においては、高齢者、障害者向けの小規模移動サービスも検討する。

○トラムなどの導入による園内移動の利便性の確保

○ハード及びソフト面におけるユニバーサルデザインの推進

【動線計画図】

